

「十三夜の月(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

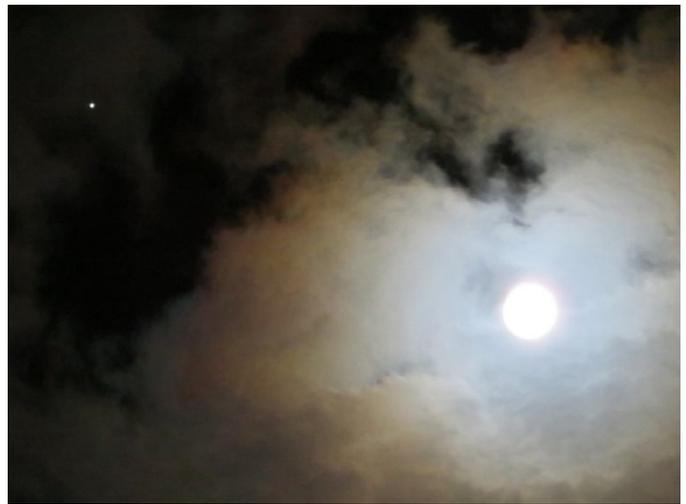
「大気光学現象」は、主として太陽光や月光を、大気中の水分(水滴や氷晶)が、屈折・反射・回折などを起こし、太陽や月の周囲にさまざまな形状や色が見える現象である。太陽のほうはずっと明るく、また昼間に見えるので観察する機会が多いが、稀に月でも見られる。



写真は月に「巻層雲」(上層の氷晶の雲)がかかった時に現れる「月暈(げつうん)」という大気光学現象である。北極圏で撮影されたものだ。よく見ると、暈にはわずかに色がついている。



この晩に観測されたのは、月に「高層雲」(中層雲の一種の水滴の雲)がかかった時に見られる「月光環」だった。月暈よりも高い頻度で見られ、色も鮮やかだ。



この日の十三夜では、「月光環」とは別に、もう一つの「天体ショー」が見られた。月の左上(西側)に明るい星が寄り添っていたのだ。多くの観望者が気づいたと思う。



これは「木星」である。木星も月も、常に天球上の太陽の通り道である「黄道(こうどう)」の近くに位置するので、おおむね一ヶ月に一回接近する。時には月と木星が完全に重なる「星食(掩蔽)」が起きる。今年の8月にも観測された。



北軽井沢では夜半、少しずつ雲が晴れてきた。満月が近い月はかなり明るいので、薄い雲を通してなら、月の地形まで撮影できる。しかし、やはり月の手前を去来する雲が、撮影には邪魔だった。